

伊勢物語『東下り』定期テスト対策問題 解答・解説

■ 解答・解説

問1 (解答例) わが身を必要のない(役に立たない)ものと思い込んで。

〔解説〕「要なし」は「必要がない・役に立たない」、「思ひなす」は「(無理に) そう思い込む」という意味です。男が都での自分の存在を見限り、東国へ旅立つきっかけとなる気持ちを表しています。

問2 「じ」=打消の意志(～まい・～ないでおこう)。「べき」=(ここでは)意志・適当(～のがよい・～よう)。

〔解説〕「京にはあらじ」は「(もう) 都にはいるまい」という打消の意志、「住むべき国求めに」は「住むのにふさわしい国を求めて」で、「べし」は適当・意志の意味でとらえます。助動詞「じ」「べし」は意味が複数あるので、文脈で判断する練習をしておきましょう。

問3 (解答例) 水の流れが、蜘蛛の足のように四方八方へいくつにも分かれているようす。

〔解説〕「蜘蛛手」は、蜘蛛の足が放射状に広がっている形にたとえた言葉で、川が幾筋にも分かれて流れているさまをいいます。この地形ゆえに橋を多く渡す必要があり、地名「八橋」の由来につながります。

問4 (解答例) 水が流れる川がいくつもの方向に分かれて流れているため、そこに橋を八つ渡してあったことから、「八橋」と呼んでいた。

〔解説〕「蜘蛛手」(問3)の地形のため、分かれた流れそれぞれに橋を渡す必要があり、橋が八つあったことが地名の由来です。

問5 答え=折句(おりく) / 読み取れる言葉=かきつばた

〔解説〕各句の頭の音が続けると「からころも / きつつなれにし / つましあれば / はるばるきぬる / たびをしぞ思ふ」となり、「かきつばた」が隠されています。題として与えられた「かきつばた」の五文字を各句の頭に置いて詠む、技巧的な遊びです。

問6

・傍線部②「なれ」=動詞「馴る(萎る)」(う行下二段活用)の連用形。直後の完了の助動詞「に(ぬ)」に続くため連用形です。

・傍線部③「きぬる」=カ行変格活用の動詞「来(く)」の連用形「き」+完了の助動詞「ぬ」の連体形「ぬる」。

〔解説〕「きぬる」は「来+ぬる」で、「(はるばる) 来てしまった」の意。連体形になっているのは、下の「旅」を修飾しているからです。「来(く)」はカ変なので活用(こ・き・く・くる・くれ・こ)も合わせて確認しておきましょう。

問7 (解答例) 一行の人々はみな、乾飯の上に涙を落として、その乾飯がふやけてしまった。 / 理由=都に残してきた妻や親しい人を思い出し、旅の心細さに堪えられず涙したから。

〔解説〕「ほとぶ」は「ふやける・水気を含んでふくれる」という意味の動詞です。「乾飯(=干した飯)」が涙でふやけるといふ、悲しみの深さをややユーモラスに表した有名な表現です。

問8 「ほとぶ」=水気を含んでふやける・ふくれる。 / 「乾飯」=米を炊いてから干した、携帯用の保存食(旅先で水などでもどして食べた)。

〔解説〕「乾飯（かれいひ／かれいい）」は旅のための乾燥食品です。その乾いた飯が涙で「ほとぶ（ふやける）」ほど人々が泣いた、という描写で、旅の悲しみが強調されています。

問9（解答例）「すずろなり」＝（自分の意志とは関係なく）思いがけない・なんとなく心細い、わけもなく不安な感じだ。

〔解説〕ここは「もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに」で、暗く細い山道に分け入り、「思いがけないつらい目にあうことだ」と心細がっている場面です。「めを見る」は「目にあう・経験する」の意。

問10（解答例）「このような（暗く心細い）道を、どうしていらっしゃるのか（＝なぜこんな所をおいでなのか）」／対象＝修行者（旅の途中で出会った顔見知りの人）／敬語の種類＝尊敬語。

〔解説〕「いかでか」は「どうして～か」という疑問・驚きを表します。「います（坐す・在す）」は「あり・をり・行く・来」の尊敬語で、「いらっしゃる」の意。出会った相手である修行者を敬って用いられています。

問11（解答例）「うつ」には、地名の「宇津（の山）」と、「うつつ（＝現実）」の意味が掛けられている。

〔解説〕「駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも…」と、地名「宇津」から同音の「うつつ（現実）」を導き出す掛詞になっています。意味は「現実にも夢の中にも、あの人に会えないことだなあ」。都に残した恋しい人に、現実でも夢でも会えないつらさを詠んでいます。

問12（解答例・15字以内）都を遠く離れた旅の心細さと望郷の思い。

〔解説〕「限りなく遠くも来にけるかな（＝この上なく遠くまで来てしまったなあ）」と、「わびあへる（＝互いに思い嘆いている）」から、都を遠く離れてしまったことへの心細さ・寂しさと、都を恋しく思う気持ちが読み取れます。字数指定がある場合は「旅の心細さ」「望郷の念」などの要素を端的にまとめましょう。

問13（解答例）「都鳥」というのは「都」という名を持つ鳥なのだから、その名にふさわしい力があるなら、という意味。鳥の名に「都」が入っていることに掛けて、都のことを尋ねようとしている。

〔解説〕「名にし負ふ」は「（その）名を持つ・名にふさわしい」の意。「都鳥」という名にことよせて、都に残してきた恋しい人の安否を鳥に問いかけています。

問14（解答例）都に残してきた恋しい人が無事であるかどうかを案じ、はるばる旅をしてきた身の上を悲しく思う心情。／裏づけの一文＝「とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。」

〔解説〕「わが思ふ人はありやなしや（＝私の思う人は無事であるか、いないのか）」と都鳥に問いかける形で、都を恋い慕う望郷の念が表れています。歌の直後に「舟こぞりて泣きにけり（＝舟中の人がみな泣いた）」とあり、一同が同じ思いに胸を打たれたことが、心情を読み取る決め手になります。

問15（解答例）

- ・「なれ」＝衣が体に「萎れる（着なじむ）」意味と、長年連れ添って「馴れる（親しむ）」意味。
- ・「つま」＝衣の「褌（着物の裾の端）」と、「妻」。
- ・「はるばる」＝衣を「張る」意味と、「遙々（遠くまで）」の意味。

技法＝掛詞（かけことば）。

〔解説〕一つの語に二つ以上の意味を重ねる技法を掛詞といいます。「から衣（唐衣）」という衣に関する語に縁のある「萎る・褌・張る」と、旅と妻を思う心情を表す「馴る・妻・遙々」とが、巧みに掛け合わされています。

問16 答え＝「き(着)つつ」(＝「着る」)を導いている／技法＝枕詞(まくらことば)。

〔解説〕「から衣(唐衣)」は「着る・裁つ・袖・裾」など衣に関する語を導く言葉で、ここでは「き(着)つつなれ…」を導いています。

※「枕詞」と答えるか「序詞」と答えるかは教科書・問題集によって扱いが分かれます。お使いの教材の表記に合わせてください。なお「序詞」は、ある語を導くために即興的に置かれる、ふつう七音以上の比較的長い前置きの言葉を指します。

問17 答え＝縁語(えんご)

〔解説〕「から衣」を中心に、「着る・なれ(萎る)・つま(褌)・はる(張る)」という衣に関係する語が一首の中に意識的に詠み込まれています。このように、一つの中心となる語に関係の深い語を連ねて表現効果を高める技法を縁語といいます。掛詞(問15)とあわせて、この歌の修辞の見どころです。

問18 (1)「し」＝意味を強める働きの副助詞(強意の「し」)。(訳には直接表れません。)

(2)「ぞ…思ふ」＝係り結び(の法則)。係助詞「ぞ」を受けて、文末の「思ふ」が連体形で結ばれています。

〔解説〕「旅をしぞ思ふ」は「(こうして遠くまで来てしまった)旅のことをしみじみと思うことだ」の意。「ぞ・なむ・や・か」は連体形、「こそ」は已然形で結ぶ、という係り結びのきまりを確認しておきましょう。

問19 (1)「ぬ」＝打消の助動詞「ず」の連体形(～ない)。

(2)「なり」＝断定の助動詞「なり」。

(3)「けり」＝詠嘆の助動詞「けり」(～だなあ)。

〔解説〕「あはぬなりけり」は「(人に)会えないのだなあ」。「あは」は四段動詞「あふ」の未然形で、打消「ぬ(ず)」がつき、さらに断定「なり」＋詠嘆「けり」が重なって、会えないことへのしみじみとした嘆きを表しています。和歌の文末の「けり」は詠嘆になることが多い点に注意しましょう。

問20 答え＝歌物語(うたものがたり)

〔解説〕和歌を中心に、その歌が詠まれた経緯を短い章段の物語として描いた作品を歌物語といいます。

『伊勢物語』はその代表作で、ほかに『大和物語』『平中物語』などがあります。

問21 答え＝在原業平(ありわらのなりひら)／代表的な総称＝六歌仙(または三十六歌仙)。

〔解説〕『伊勢物語』の主人公「昔、男…」は、平安初期の歌人で六歌仙・三十六歌仙の一人である在原業平がモデルとされています。なお、これはあくまで「モデルとされる」人物であり、作品全体が業平の事績そのものというわけではない点に注意しましょう。
